

現実を超える想像力を —After the “September 11, 2001” の大学

増成隆士

人文社会科学研究科教授

「N.Y. を理解するには、マンハッタンの規模を知ることだ。それには WTC の屋上に上がってみるのが一番である。107階の展望フロアに立つときに見える光景は、N.Y.

がここ 300 年ほどに目指してきたものの結果である。それを輝かしいものと見るか、あるいは虚飾と見るかは、見る人次第だ。いずれにしても、展望台で哲学的になれる



(c) Takashi MASUNARI

ところなど滅多にない。」——観光ガイドブックの文章としては異色のこの一文……〔〔JTbのマップガイド8〕ひとり歩きのニューヨーク JTb日本交通公社出版事業部、1996年〕。

「哲学的になれる展望台」、いや、「ひとを哲学的にする展望台」というべきか……。2001年7月2日の夕刻でした。あの107階という高層で摩天楼の夕映えに魅せられながら、私はエンパイアステイトビルの展望階から見るマンハッタンとはちがう、たしかに“ひとを哲学的にする”と感じるマンハッタンの光景を眺めていました。

あの眺望を眼前にして、この超高層ビルの2ヶ月後の“想像を絶する事態”など、誰が想像していたでしょう。いや、今、ふりかえってみると、あそこに立って、あのビルの炎上・崩落の図を思い描きながら、ニューヨークの「見納め」をしていたひともいたのかもしれないという思いも浮かんできます。

また、あのとき私を魅了していた摩天楼群の俯瞰の光景をいま写真で見ると、それは“虚飾”的なニューヨークの風景というより、日本の墓地の風景のように見えます。

想像の飛翔力

「未曾有」「超弩級」という言葉がおそろしいほどにあてはまるあのできごと。あれからはや3年近くが経ちましたが、「あれを

分岐点として世界は変わった」と言っても決して誇張ではないあのできごとは、今も、想像力の現実的必要性について考えさせる強い力をもっています。

想像の飛翔力はひとによってちがうとはいっても、意外に限定されていて（——ニューヨーク、2001年9月11日朝のあの現実に近い光景は、あの現実に先立って、アメリカのある作家のベストセラー小説の冒頭すでに描かれていたということで、その作家はすでに想像していたわけですが、しかし、その作家においても、その“想像のリアリティー”はどの程度であったか。“想像を絶すること”を想像するということと、それをリアルに感じるということとのあいだには、大きな隔たりがあります）、現実の方が想像を超えてすることは、個々人の身近なことから社会あるいは世界全体のことにしてまで、数多くあります。

あのできごとが超弩級のものと感じられたのは、“超大国アメリカ”を象徴する代表的なもののひとつである超高層ビルの“代表”であるビルのど真ん中に大型ジェット旅客機が突入・爆発した光景がテレビで全世界の“お茶の間”に伝えられ、しかも、それにつづいてもうひとつの大型ジェット旅客機が突入、ビルが炎上、すさまじい黒煙……、そして、崩壊、という光景がテレビの生中継で伝えられるという前代未聞のこ

とが起つたからでもあります、最先端の建築工法の結晶と多くのひとが考えていた巨大建造物の崩壊は、それ自体、“想像を絶するできごと”でした。

“大きさ”と“体制”が生む過信

想像力はさまざまに限定されていますが、根本的なレベルでの限定を生んでいるのは、人間の思考の根底の枠組みをなしているもので、そこには感覚もかかわっています。

そして、感覚の中で、われわれのものの見方、考え方、感じ方にもっとも強い力を及ぼしているのは、大多数のひとにおいて、視覚で、この視覚には、巨大なものに圧倒され、それに対する冷静なスタンスを喪失してゆく傾向があります。古代から現代に至るまで、多くの宗教が巨大な神殿を建造しているのも、その活動のための実際上の必要性以上に、われわれの視覚の上述の傾向に呼応するためのものです。あるいは、豪華客船タイタニックの沈没が世界を驚かせた、その重要な理由のひとつに、その船の巨大さということがあります。あれほど巨大な船の沈没などということは想像もできなかったのです。

マンハッタンの摩天楼は力学構造の面からも防災の面からも十分に堅固・安全なものとして建てられている（——こんな巨

大ものは、安全性が確認されているからこそ許可されている、——安全でないものが許可されているはずがない）とたいていのひとは考えています。鋼鉄、ガラスなど、近代的な材料を中心とした、且つ、単純な直線と直方体、などを特徴とした国際様式の高層ビルでは、その造形上のシンプルさも「超高層ビル建築としての安全性は保証されている」という印象に貢献しています。

建造物の強さは、しかし、われわれの視覚の法則に拗っているわけではありません。結果から見ると、あの建造物の安全性についてのわれわれの思いには重大な欠落があったのです。大型ジェット旅客機の突入が、自爆テロによるものではなく、なんらかの事情で制御不能になったことによるものであったとしても、あれは大惨事となつたのです。

巨大なものができあがってしまうと、その“現実”はより大きな力を發揮し、われわれの思考は、そして想像力までもが、それに服従しがちになります。

また、見たたくない事実、耳を傾けたくない真実、というようなものもあり、そうしたものから多くのひとが眼と耳をそらすとき、“神話”が生まれます。たとえば、「マンハッタンの地盤は堅固であり、超高層ビルといえども、それが地震で崩れることはない」という“安全神話”。しかし、マンハッ

タンの足下には、活断層が走っており、活断層の動きによる大地震はいつ起こっても不思議ではないのです。

超高層ビルに航空機が激突するという事態も、事故としてのその可能性をゼロにすることは決してできません。

まして、テロ（——いや、そもそも「テロ」とはなにか……）。「テロがあるとしても、旅客機をハイジャックし、それで世界貿易センターのビル突入、というテロまではないだろう」と考えていたのは、いま冷静に考えてみれば、想像力の欠如以外のなにものでもありませんでした。しかし、堅固と思われる大規模なものの中で暮らしているうちに、その大規模なものの崩壊を想像する力は急速に衰え、“現実”に支配されてきます。「これが崩れるはずがない」と。その感覚を、“アメリカ”という“独り勝ち”となつた体制に対する過信が支えていたのです。

高等教育の別の姿をさえ考える想像力

巨大・強大なものに、われわれは圧倒され、われわれの想像力までもがその支配下に置かれる、——このことは、建造物など、具象的なものに限ったことではなく、社会体制あるいは文化の制度などについても言え、問題の重大さは後者の方により多くあります。

大学も、今、そのような問題意識で見る

必要がある、と私は感じています。今や誰も異を唱えることのない大きな役割を担つたものとしての大学・大学院。全体として巨大・強大なものとなっているこの高等教育、その機関、その「制度」……、その巨大さ・強大さに幻惑されることなく、その現在の姿にあらためて眼を向け、その別の姿をさえ考える想像力がいま必要ではないか……、そうしたことが私には“9月11日”的光景にオーヴァーラップして見えるのです。

（本稿は、東海大学出版会ウェブサイトの中の「Web TOKAI」に連載した拙稿「想像の練習帖」の一部を素材とし、大学に関する問題という角度からリライトしたものです。）

（ますなり たかし／美学・哲学）